
アリアドネの銀弾?【方程式】

小島 鉄平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリアドネの銀弾？【方程式】

【Nコード】

N8642X

【作者名】

小島 鉄平

【あらすじ】

エリーが一真の高校に現れた！？なんだかやりづらい一真をよそに友里が一真とエリーの関係を疑い始める。そんな学園生活を送っているよそにも、一真の周りには現実側による多数の事件が発生！全ての謎と言う真つ赤な糸を解くため、一真の推理が真実の糸をたらず！

「アリアドネの銀弾」シリーズ第二弾！

「さあ、狩らせてもらおうか、この謎の悪意を・・・」

STAGE 0

「かわいい!」「どこからきたの?」

俺の横では転向してきた恵梨香とか言う名前で転校してきた、エリーに俺のクラスに群がって対してエリーは質問攻めにあっていた。エリーと言うのは一週間前、俺が関東中で話題になった連続器物破損事件の犯人、【アステスフェンリル】と戦闘していたとき、武器が無く、防戦一方だった俺を助けてくれた少女のことだ。つまり、命の恩人と言うわけ。百五十センチあるかないかというラインの身長の幼女体系、腰辺りまで伸びてる長髪、今は黒色で、瞳の色はこげ茶色だけど・・・まあ、今は言う必要なんか無いよな?

さて、ここで大きな疑問だ。

(あいつ、何しに来たんだ?)

俺は横目でエリーの顔を見た。当然だ。エリーにとってはこの仁舞市にはもう用が無いはず。それもよりよって俺のいる仁舞高校にに転校という形で現れやがった。まったく、何のつもりなんだ。これが単なる偶然なのか、それとも狙ってここにやってきたのか。それは本人に直接聞くしか、知る手立ては無いが、そんな事聞いたって教えてくれるはずも無い。俺は大きいため息を吐いた。

にしてもなあ・・・。あんだけ興味持ってもらってるのに、そんなツンとするなよ。みんなの質問なんか、まるで聞いちゃいない。どこか気が抜けているかのように、エリーは窓の外に目をやり、そこから視線を全く動かしていない。ま、あんなツンっしてしてるけど、見た目はかわいいから人気なんだろうが・・・。

全く、俺の生活は、どの方向に向かっているんだ?

STAGE 1

さて、いきなり出オチしそうな予感しかしないのだが、一応エリーに聞いてみよう俺は思った。しかし、ただ単に直球ストレートみたいに聞いても多分はぐらかされる。だから、ここは最初に遠まわしに、そして、不意を突くように、本題を投げかけてみよう。俺が授業中ゲームして時間を過ごしている間に、いつの間にやら今日最後の授業の終了を告げるチャイムが鳴った。

さ、いきなり聞いて見ようなんて馬鹿な真似なんか俺にはできない。あんな事の話なんか、クラスのおんなの居るところでできるわけも無い。しかし、聞いてみると同時に、確かめたいことがある。俺は授業が終わった時間になっても、ゲームをして時間を潰していた。最悪でも、俺のすぐ右前の席に座っている、エリーはそう思っているだろう。俺はゲーム画面に集中しつつも、ダンジョン中に隙を見つけては、エリーのほうへ目を配らせた。エリー本人はずっと本を読んで静かにしていた。

さあ、どこかに行って見る。俺はエリーの背中に必死で念じてみせた。じゃねえと、聞きたい事が増える。そして気づけば一つのダンジョンをクリアしていた。

(結構時間掛けたな)

俺は小さく鼻で息を吐きながら、後頭部を掻いた。さて、ボス攻略に挑むか。

俺はいつもの癖でゲームを机の上において、両手の五本の指全部の間接を鳴らして、首筋を鳴らした。そして、いつもの癖にある作業を付け加えるように目を開いて、エリーの姿を確認した。

(まだ居るな)

おし、これで確定づいた。いや、まだ七十%ぐらいだが……。けど、こいつがここに居る理由が分かった。こいつは・・・俺を、俺を監視しに来たんだ。あのときの戦いだ。俺はあのときの戦いを

回想した。

ソニックブレイド

俺はあの攻撃で、アステスに止めをさした。いや、刺してしまつたというべきか。今この状況では。あんな止めの刺し方をしたもんだからこんな厄介な監視がついた。どうする、俺。このエリーを振り切るのは、至難の業だぞ。

俺は目を閉じ、考え込んだ。どうやってこいつを振り切る？

しばらく考え込んでから、俺は結論に辿り着いた。

(いや、今は振り切る必要なんか無い)

俺はPMPをスリープモードにしてそれをケースにしまい、PMを入れたそのケースをエナメルバッグの中に入れ、それを肩に掛けて立ち上がった。その様子を見てだろうエリーは俺を一瞥をした。分かりやすいな。それかわざとか・・・わざとなら乗ってやろう。お前の組んだ策略とやらに。

俺は廊下に出た後も背後の気配に気を配りながら帰路をたどった。いまは俺の後ろのエリーは居ない。と言うことは裏道か・・・いや、あいつならあり得るルートはもう一つあるか。上だ。俺がエリーのことを感じていいると言うことをあいつが分かつてるなら、そして、あいつが俺の後ろに居ないとしたら、俺が真っ先に思いそうなことは唯一つ。

『エリーは裏道に張っていて、俺を待ち伏せている』

たぶん、あいつのことを知っていなかったとしたら、俺は常識的にそう考ええただろう。しかし、エリーに常識は通用しない。それは、あいつの戦いを間近で見た俺が分かる。

しかし、後ろに居ないって言う事になったら裏口か、上にいるこ

とになる。そして、俺の帰り道で最も帰りやすい裏道は……。

俺はその方向に向かって走り出した。仁舞通り仁のまいどおりのスクールワンの塾と、K I 仁舞支社ビルの間にある隙間道だ！

俺は走った。とりあえずその地点に居よう。いや、多分俺が走ったらあいつはそれに気づいて、俺より一足先にその裏道に入って不意打ちに入るだろう。だったら……。常識の通らない少女には、常識を考えて行動をすればいけない。常識外のことを考えて行動するのが得策なのだ。

「はあはあ……」

俺の予想は当たってくれていた。俺の目の前には腕で壁に押さえつけられて俺の腕を退かそうと力をこめるエリーの姿があった。さあ、本題をぶつけてみるか。

「さあ、言ってもらおうか。どうしてお前は俺に付きまとう？俺はお前にいったい何をしたんだよ！」

「ま、まず、これを離せ……」

エリーは苦悶の表情を浮かべ、彼女を抑えている俺の腕をどこそと力を入れていた。結構強い力だな。俺もこいつの押し出す力に必死で抵抗していた。さすが、戦いのエキスパートだ。

ま、このままじゃ事情を聞くより先にエリーの息の根を止めかねない。俺は力を緩め、後はエリーの力で退かせた。相当強く締め付けられていたのだろう。エリーは自分の首筋を押さえ、呼吸を整えていた。ここまでしなければ俺の言葉なんか聞いてくれないのか……。？良かったぜ。もしあん時みたいに武器とか使つての戦いなら俺はフルボッコだったな。ただの格闘術の戦いだったから、俺が勝てたんだな。

俺はそう解釈して呼吸を整えながらエリーから一步後ろに下がった。しかし、エリーからは目を離さない。逃げる可能性だって十分に考えられる。しかしエリーは呼吸が整うや否や、俺のほうへじつと見据えた。俺を観察するかのように……。

「さあ、呼吸も整っただろう、何で俺に付きまとうのか、話してもらおうか。」

「待て。その前に、お前のPLDを見せる」

PLD？あの携帯端末のことか？しかも命令口調かよ。ま、これは持つても良いけど……。まあ、つべこべ言わず渡すか。

俺は鞆の中を探り探りしてそのPLDとやらを取り出した。俺がPLDを掴むと、エリーの目がそっちに向かった。やっぱり、こいつが狙いか。

「ほら、これだろ？返すぜ」

俺はPLDをエリーに手渡すと、エリーは自分のと見比べ、エリーは左手に持つ自分のを懐にしまい、俺の黒いPLDを差し出してきた。

「ん？いらんのか？」

「いらんも何も、これはお前の物だ。それに、私はもうそれを手に持つ気は無い」

まるで機械みたいだ。ただ淡々と言うことを言ってる感じだった。まあ、これを俺にくれるってんなら、別に拒みはしないけど……。俺はエリーからPLDを手渡されると、目を見開いた。

「エリー、お前その手……」

エリーの手が真っ黒にこげていた。いや普通の対応だろ？目の前で手が焦げてるなんて光景を見たら、そりゃあびっくりだ。異常なのはエリーだ。これを我慢していたのか。だからさっき俺のPRDは持つ気は無いって言ったのか。持ちたくないと言うわけだ。エリーはそんな事を表情に浮かべず、自分のこげた手のひらをみてさもつまらなさそうな表情を浮かべ、制服のスカートのポケットにその手を突っ込んだ。

「気にするな。これよりもっと酷い目にあつたことがある。ごく最近で……」

エリーは俺から視線をはずした。おいおい、あれよりもっと酷い目にあつたのか？いっただんな場所に居たんだよ。

「何が起こったんだ？」

「つい聞いてしまった。」

「お前に首を絞められて死にかけた」

「……………」

「かける言葉も無い。ごく最近の酷いダメージが俺のせいだとは。」

「……………」

「……………」

「ごめん……………」

「今頃遅い」

せつかく謝ったのに冷たく返された。きつい女だな。俺は困り果てて後頭部を搔いた。

「さて、本題に返ろうか？なんでお前は俺に付きまとうんだ？」

「それは、帰り道で言っただけ」

「……………誰の？」

「お前の」

「……………上がりこむつもりか？」

さて、傍から見れば彼氏と彼女の関係に見えそうな状態だが、それは仕方が無し、と言うわけだ。帰り道でも聞きたいことはきけた。

「俺を監視？」

「そう、私が直々に願い出てね」

「直々って…………俺が何か問題あんのか？」

俺は率直な問題をぶつけてみた。

「大有りよ」

エリーは立ち止まり、俺もエリーに合わせて立ち止まった。エリーは俺のほうへ向き、俺は横目でエリーの顔を眺めた。

「知らないでしょうけど、通常私たちには生まれたころから風・林・火・山・雷・陰も六つの内一つの性質、つまり性質を受け継ぐ^{カタストロフ}の。ちなみに私は火の性質よ。^{カタストロフ}つまり、本来なら私は火属性の攻撃

しできない」

「ちよつと待て！」

俺はエリーの話にストップをかけた。

「じゃあ、あの時はどうなんだ？お前が言うようにどれか一つの性質カタストロフの技しか使えないじゃあ、お前はどうなるんだよ」

俺はエリーに向き直ってエリーに向かつて指を刺した。

「お前はあの時火以外の性質カタストロフの技を使っただろう？あれはどうなるんだよ。あんなことがあるならお前がさっき言ったこととかなり矛盾を起こしちまうだろ？」

「言つたでしょ私は。本来ならつて。私は例外中の例外。私みたいな奴なんて今まであんまり会つたこと無い。ま、歩きながら話しましよ」

そういつてエリーは俺の先を歩いていった。

「おい、俺の家分かつてんのか？」

「当然でしょ。あなたのことは何もかも調査済みよ」

エリーは立ち止まり、俺のほうへ振り向いた。髪の毛が風になびかされ、流れていくように揺れていた。

「何してるの？【殺し神ころしがみ】」

「・・・・・・・・」

確かに、徹底的に調べ上げてみたいだな。

俺は納得したように溜め息を吐き、エリーの後ろから付いていった。

時は流れここは俺の部屋だ。

「じゃ、ここまでの話を整理させてもらつぞ」

「勝手に」

俺のベッドに腰掛けて腕を組んでるエリーの前で、自分の唇を覆い隠すような、つまり俺が考えを整理するときの癖をして、エリーから聞いた話を一通りに整理してみた。

彼女が俺をつけていた理由は「桐ヶ谷一真および、桐ヶ谷一真の力の観察及び監視」と言うことだ。事件の発端は十一年前にあった現実リアルと仮想の境界線の崩壊が事を起こし続けていたと言う。両世界の影響を考え対策として立てられたのがPPA（Parallel Paradox Assault）と言う組織らしい。さらにその組織で戦闘の精鋭たちにはPLD（Parallel Link D e v i s e）と呼ばれる、言うなれば向こう側の力をこちら側で発動及び、零れ物ジャンクをサーチして近くに寄ればあの時間が止まった空間パラドックス境界を自動的に発生させる携帯端末らしい。その所持者のことを一般に『リンカー』と言うらしい。もちろん、所持者の意で境界を発生させることも可能らしい。つまり、テロや反旗を翻した奴は消されるというわけだ。そして、その空間なら生まれたときから持つてくる風・林・火・山・雷・陰の六つの内どれか一つの性質カタストロフの技を発動できるらしい。（全ての性質カタストロフを使えるエリーは例外らしいが彼女の本質は火の性質らしい）

そして、ここからが本題だ。彼女の言うように風・林・火・山・雷・陰のどれかの性質を持つてなくてはあまりにもおかしい。俺に至っては例外中の例外だ。何せ、俺は仮想側ゲームの人間ではない現実側リアルの人間だ。そんな奴がPLDを手にすることなんてできるはずが無いと彼女は言っていた。今はツンとして俺から目をそらしてるけど……。

そして、本質的な理由、「桐ヶ谷一真および、桐ヶ谷一真の力の観察及び監視」と言うエリーに課せられたには彼女はこんなことを言っていた。

あなたからは察知できなかったのよ。六つの性質カタストロフどれからも察知できなかったのよ。つまり、あなたは特異性質ユニークトロフなのよ。

そついう事か。俺は左手で右目を隠すようなあの仕草をした。意識はあるものの、いつもこの癖をしてしまう。たぶん、する前の記

憶は丸ごと吹き飛ばんだろう。気づいたときだからな。

まとめてみよう。こいつは俺があまりにも摩訶不思議すぎて自分から進んで俺の観察を志願した、と言う事だ。しかも、俺が最後に勝手に発動したソニックブレイド、あの構え方はどう見ても「アステス・フェンリル」の最速その物だったと言う。しかも、俺の右目には紋章が浮かんでいたらしい。魔方陣のような、紋章が。

「つまり、お前は私たち側の存在なのかも、お前たち側の存在なのかも分からないと言うことだ。いや、お前は存在しているのからな。お前の存在は………」

俺は息を呑んだ。

「存在していないのかもしれない」

STAGE 2

「俺が・・・存在しない、だと？」

俺はあまりにも衝撃的過ぎて、俺の脳の要領をもつてしても、頭の中が真っ白になって呆然とした。いや、むしろ落ち着いたと言うのが正しいか。

「あまりびつくりしないのね、お前」

エリーは足をパタパタさせて俺の顔を覗き込んだ。

「いや、びつくりしてるよ。話が衝撃的過ぎてむしろ落ち着くつていうか、なんていうかな・・・」

「・・・」

「よく分かんねえな。俺でも分からない」

「変なの」

エリーが滑稽な者を見たというような笑みをこぼした。何だよ、馬鹿にすんなよな。お前だったらどうなるんだよって聞きたいことだが、これは友里と同じパターンだな。聞いたら逆上されて戦闘勃発になる。そうなれば俺はフルボッコだ。俺はずれた伊達眼鏡を押し当てて位置を戻した。

「で、俺はどうなるんだ？」

「なにが？」

「俺はこれからはお前に付きっ切りにされるっていうのか？」

「たぶん、ね」

俺は滑稽すぎて口元で笑った。そんな深刻そうな表情すんなよ。知りたければいくらでも知ればいい。お前たちが知ること、俺もエリーが言った、「桐ヶ谷一真は存在しない」と言う意味が分かるかもしれない。

「わかったよ・・・」

俺はしぶしぶ認めた。それを象徴するかのようにはじょうがないと言う表情を浮かべながら後頭部を掻いた。

「へ？」

「俺が母さんをうまく言いくるめて、お前の部屋を確保させておいてやる。だから、お前は居候と言っ形になるな」

俺はズビシつとエリーに向けて指を刺した。

「それに、どうせ宿が無い間は外で寝てたんだろっ？」

「へ？わたつそんな事何も」

「お前の頬だよ」

「頬？」

俺の言葉を聴いて、エリーはごしごしと自分の頬をぬぐってみせた。

「どうせお前たち側の科学で体を清めてるんだろが、頬についた新聞紙の印刷はしっかり取れてないようだな。お前の足や腕の肌の色と比べて、お前の頬の肌の色はほんのちよつと黒ずんでる。しかも、お前がこの一週間俺の家を嗅ぎ回ったって事は、この仁舞市を探しまくったって事だろ？すぐに見つけたんなら俺の学校に顔を出すのは三、四日ぐらいで充分。でも、お前がこの学校に顔を出したのは一週間ぐらい。俺も一回この町を一周したこと歩けど、そのときは俺も一週間ぐらいだったかな。そんなだけ時間かけたことは、お前も自分の足で調べ上げたんだろっが、食料は大丈夫でも体だけは、大雑把でしようがなかったらしいな」

「・・・・・・・・」

「凶星か？」

「頬の黒ずみと私がお前の前に姿を現したときの日数から私が次にお前の前に姿を現した日数で、そんな事まで予測できるなんて、ほんとにお前は何者？」

同じ事聞かれたな。あの時も。

「言っただろ？世間じゃ俺は高校生探偵だつて言われてるんだよ」

「高校生・・・探偵？」

エリーがその単語を呟いた瞬間、エリーが俺の目の前でわざとらしく噴出した。

「んだよ……。俺だつていつの間にやらそうなつちまつてんだよ」

「いつの間にやらつてなによそれ」

エリーは笑いをこらえているせいか、涙がうつすらと見えている。こいつ、とことん俺を馬鹿にしてやがるな。俺は苦笑いを浮かべ、どう毒づこうか考えていた。考えていたが、結局その方法は見つからなかった。

「だ〜から〜、何でそつち方面しか行かないんだよ!!」

俺はエリーを後ろに立たせ、俺は母さんを説得及び説教を繰り返していた。もうさつきから同じパターンばかりだ。全く、なんだよこの母親は！困ったもんだな！

「でもお、一ちゃんいちが女の子の居候を許すなんて珍しすぎてね〜」

「珍しい？いや、そこは話になんか乗ってない！つまり、桐谷の居候を許すのか？許さねえのか？」

「どうしよっかなあ」

俺の母さん、桐ヶ谷真由子きりがやまゆこは小悪魔的な笑みを浮かべ、俺をじと目。説得にこんな時間かかるなんて予想外にもほどがある。ま、いつもより時間はかかるってことぐらい予想したけど、居候って言うスケールはあまりにも大きくなりすぎたのだから。泊めると居候はやっぱりスケールがあまりにも違いすぎたんだらうな。

後ろに居るエリーは痺れを切らせたんだらうか、俺を押しわけ、俺と母さんの間に入った。痛つてえな。思いつきり強くやりやがった。

そして、両手を合わせて、まるで神様に祈るかのような表情を出した。どこぞの訪れシスターかよ、お前は。

「お願いしますおば様、アメリカから久しぶりに帰って、当分の間ホテル暮らしをしてたんですけど、そろそろ宿泊費が足りなくなつたんです。でも、だからと言ってあそこを抜け出すと泊まる宛て

も無くて・・・」

すると、エリーが俯き涙をブワツと浮かべた。エリー、お前そんなキャラだったけ？キャラ作りうまいな、お前。

今日始めてこいつに本気で感嘆した。

「夜で道端で寝るのはあまりにも怖くて・・・」

寝てただろ。お前。んで、俺の予想が正しければ不良どもに出会うたびに全員フルボッコしてきたんだろ？今まで。しかし、そんな事口が裂けてもいえない。言えばエリーと戦闘勃発だ。確実に消される。怖いなあ、この世界。

経つことおよそ三十分、やっと。母さんもノックダウンしてくれた。・・・俺なんか仕事奪われてほとんどエリーに任せっ切りだったけどな。

エリーが俺の部屋に入るやいなや、どかつと俺のベッドに座り込んだ。おいおい、すごいキャラの豹変振りだな。さっきまでは気弱い淑女だったのにな。ほとんどシスターに近かったな。雰囲気はな・・・。

「んで、俺の性質カタストロフはどうやって調べるんだ？最悪、お前とは戦う気は無いぞ。どうせボッコボコにされるしな」

「さつきはしたじやない、私を。何なの？あれ」

「ジークンダー 截拳道だけど？それに格闘術なら負ける気はしなかったからな」

「ふうん、あれが截拳道・・・ね。どこが？」

「俺も思ってるよ」

警部、俺にも仲間ができたぜ。やっぱりあれは截拳道じゃないんだよ。よける美学とか、ほとんど攻めないしな。横鴨一門の截拳道は。守ってばっか。避けてばっかだもんな。ま、反面世界一美しい截拳道って言われてるけど。

「んで、もう一度言っぞ。俺の性質カタストロフはどうやって知るんだ？」

俺のこの続けるの質問にエリーは悪戯っぽさを含めた笑みを浮か

べた。

「心配なしよ。もう、ジュールが反応を掴んだらしいから」

「.....」

戦うのは変わらないらしいな。

俺は息を呑みながら、右手で強い握りこぶしを作った。

STAGE 3

「行動早いな」

「私じゃないわ、私のサポートブレインのジュールよ。しゃべり方完全に馬鹿だけどそっち方面なら私よりも頭が切れるわ。ブレインとしては適材ね」

「そうかい、そりゃあ良かったな。漫才みたいなトークができて毎日が楽しいだろ？」

俺は思わず笑みを浮かべて、噴出した。あれ？気づいたら眼鏡が……。伊達眼鏡でも汚れたら変な視界だ。俺は眼鏡を外して、眼鏡拭きをポケットから取り出して満遍なく眼鏡に付いた汚れを拭いた。エリーには俺が眼鏡を外すのは珍しく見えるのだろう。エリーは俯いてる俺の顔を覗き込んできた。エリーの視線に気づき、俺はエリーの方へむいた。エリーのあまりにも不思議な物を見るような表情に思わず噴出した。

「んだよ。なんか変か？」

俺がそういうとエリーはいきなり頬を赤らめて、向こうへ向いた。

「べ、別になんでもない。何にも無い！」

「何でそう必死になる？」

エリーはふてくされたような表情を浮かべて。俺の顔を見てきた。

「……………」

「……………」

んだよ、この沈黙の時間は。面倒くさいことになりそうだな。その沈黙の時間に痺れを切らせたのかエリーは俺のほうへ振り向いて怒ったような表情を浮かべた。

「うるさい！黙れ！それ以上言うな！」

「んだよ、耳に響くなあ。何も言っただけじゃねえか」

ホントにうるさいなあ。首をやたらめったに振るもんだからこいつの髪の毛が俺の顔面に当たりそうだな。ま、もちろんそんなことは

無いけど。俺は迷惑そうな表情を浮かべて耳を塞ぐように指を耳の穴に突っ込んだ。ミスったなあ。こいつこのまま路上で寝かせるのが正解だったな。俺は顔をしかめて首を横に振った。

するとエリーがいきなり窓を開けた。

「どうした？高飛びでもする気か？」

「んなわけないでしょ！ちよつと屋上で涼んでくる」

「屋上って・・・」

俺は苦笑いを浮かべて、エリーがベランダの手すりに足をかけてひよいつと飛び上がって屋上に上っていくのを見送った。

「ああもうむかつく！」

『エリー・・・』

PLDの無線の奥では恐らくジュールは苦笑いを浮かべてるだろう。ジュールも途中経過を知っていた。知っていて余りにもエリーが怒ってる理由が分からない。たぶん、自ずと分かるだろうと思ってるから、ジュールは何も言わない。

「なんなのよ、何であいつは私の顔を見るなり、あんな顔をしだしたよ！」

エリーは子供が駄々をこねるかのように上向きに寝転がって手足をばたつかせて暴れた。たぶん、下に居る一真は「何やってんだ、あいつ」とか呟いているに違いない。それがどんな表情か大体予想できる。予想できるせいでさらにエリーの怒りは最高点に達してしまふ。

『やめない？エリー。カズマが怒っちゃうヨ』

その言葉とともにエリーが静かになった。パターンと手足の暴走を止めた。

「分かってるわよ。でもなんだかむかつく・・・」

エリーは唇をとんがらせて夜空を見上げた。この仁舞市は夜はほとんど真っ暗だ。街灯がちらほらとあるだけで後は何にも無い。エ

リーの目の瞳には仁舞独特の星空が映っていた。

「ジュール……」

『なんだい？』

「何で私怒ってるんだろ……」

『さあ、ボクには分からないネ。でも、予測はできる』

「な、何？何でなの？」

エリーが無線越しにジュールに噛み付いた。向こうではジュールの苦笑いが聞こえる。

『まあ、その理由はエリーが自分で知る必要があるネ。ヒントは、たぶんエリーが始めて持つ感情じゃないかな？』

「何よ、何で遠まわし？」

エリーが呆れたような表情を浮かべ、無線をにらんだ。もちろん、そこにはジュールの顔は認識できないし、ジュールもエリーの顔が認識できない。それでも声の調子で大体どんな顔が分かる。ジュールに呆れられた。そう自覚した瞬間、エリーの感情の奥からどうしようもない感情がどっと流れ出てくるのが感じた。

その感覚に浸っている間に、なんだか眠く……。

「エリー！」

俺は屋上に居るエリーの様子を見ようとエリーみたいにベランダの手すりに足をかけてジャンプしてみた。おお、案外簡単に登れるな。そういう感嘆が俺の体の内から湧き出てきた。屋上に上つてみるとエリーが今にも眠ってしまいそうな状態になっていた。何だか悪戯心が騒ぐな。びっくりさせやろう。試しにこいつの名前を大きな声で呼んでみようか。

「エリー！」

「う、うわわわ！」

エリーが驚いて手足をばたつかせて上半身を起こした。あれ？余りにも無防備だから、大声でもびっくり物だったのか？

エリーが手足をばたつかせたせいで彼女自身が斜めのこの屋根を転がり落ちそうになっていた。おいおい、そうなたら俺も被害を受けんのかよ。こわぁ。エリーが何とか体勢を整えてくれたから俺はなんとも無かったけど。

エリーはワタワタとしながらあわてた表情で俺の顔を見てきた。

「なん、何のよう!？」

「いや、俺の屋根の上が妙にうるさいから見に來ただけだ」

「……………」

エリーが凶星でも食らったかのような表情になった。やっぱり暴れてたな。

「何してんだよ、お前うるさいぞ?」

「何よ!関係ないでしょ!」

「お前は暴れて俺の家をつぶす気か?」

「どんだけ私の力が強いって思ってたのよ!」

「分からん。でも、お前ならマジでやりかねない」

「ううぐぐ」

エリーは噛み付いてきそうな犬のように犬歯をむき出しにしていた。しかし、しばらくするとエリーは勝ち誇ったような笑みを俺に浮かべてきた。

「お前、何も分かってないんじゃないの?私もパラレルリンクしなきゃ私も運動能力が急激に落ちるって事を!」

「でも、お前ならそれなしでもやっちまうだろ?」

何だか楽しくなってきた。一生こいつをいじり倒しとこ、て思うぐらい楽しかった。さぁ、お前ならどうこれに返す?エリーはしばらく黙り込みを決めていた。そうになると面白くない。だからといってこちらから仕掛けたんじゃあ意味が無い。

さぁどうする?と思いつつエリーの顔をうかがってみると、俺に今にも噛み付いてきそうな表情を浮かべていた。その表情が余りにも俺にとっては滑稽で俺は笑ってしまった。そして、どうやらそれで完全に怒りのスイッチが入ったらしい。喧騒な表情で俺をにらん

でくるや否や、立ち上がって俺にとび蹴りをかましてきた。いつもの俺ならかわすが、もし、かわしたらエリーが下に真っ逆さまだ。だからここは……。

俺はエリーのとび蹴りの着弾地点を予測してそこに手をやった。案の定、エリーのとび蹴りは俺のどてっばらに命中する算段だったらしい。しかし、甘かったなエリー。かわすことができるって言うことは防ぐこともできるんだよ。

俺の右手はエリーの脚を掴んでエリーが頭を屋根に打ち付ける前に、すばやく体勢を低くして足を持つ手を引き、（その瞬間エリーの「ひゃあ！」という悲鳴が聞こえたがそこは無視だ）エリーの頭に手を伸ばした。そして、綺麗にエリーの頭をキャッチ。すごいな、俺。普通できないぞ？

エリーを未完成ながらもお姫抱っこ状態にしてしまった俺は顔面ぶん殴りを覚悟したが、一向に何にも飛んでこない。それどころか、不思議な物を見る目で、しかも頬を赤くして俺の目を見つめていた。しかも唇も小刻みに震えている。やばいな。このフラグは。俺は危ない体勢になっていることになっていることに気づき、エリーをすぐに下ろした。エリーは体を下ろされた後でもしばらく硬直していた。ゲームで言えば、技発動後の遅延スキル Delayみたいなものだ。

「あ、ありがとう……」

ようやく口を開いた。エリーなら「今頃？」とか言いそうだが、俺はエリーじゃない。

「そうか。もうしでかすんじゃないぞ？」

俺は顔をほころばせながらエリーに言った。エリーは俺の顔を見るや否や顔を赤くして俯いた。なんだ？こいつ。変なの。俺は横目でエリーを見ながら、屋根からベランダに向かって飛び降りた。

エリーの心臓は今でもでかい心臓の鼓動を発していた。

（なんだろう、この感じ）

変な違和感があるが、いつまでもこんな感じで居たい様な変な感じがエリーを襲っていた。エリーは心臓の鼓動を抑えようと胸の心臓があるだろうという部分を掴んだ。それでもこの高鳴りはなかなか収まらない。

（言えない。だってあいつは存在しないかもしれないから）

エリーは一真のあの面影がそこに居るのかもしれないというようなまなざしで屋根の縁をみた。

（笑い顔がよかったなんて）

「何やってんだ？あいつ」

まだ降りてこない。せつかく母さんがエリーのために空けてくれた部屋に布団を出してやったのに、ほんとに何やってんだしかしここから屋根に上るのは無理がある。行けるのは俺のベランダからか・・・いや、そこぐらいか。俺はひとまず布団を出し終えて、俺の部屋に向かってその空き部屋を出た。

「エリー！降りてるかあ？」

無効では返事がない。じゃあ、降りてないって判断していいんだな？じゃあ、遠慮なく。

俺はドアノブに手をかけて、ドアを開いた。

そして、俺が絶句した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「.

エリーが下着一枚姿だから仕方がないよな。俺だって男だから、そんな光景見たら絶句するに決まってるだろ？

さあ、どうしよう。言葉が見つからない。しかも、俺でも気づかぬ間にエリーの半裸の姿を凝視。・・・いや、もちろんやらしい目じゃないぞ？エリーの顔は見る見るうちに紅潮して言った。あの紅潮が有頂天に達した時が俺の最期だ。エリーの怒りの鉄拳が俺に飛んでくるだろう。

「あ、あの・・・」

「なに？」

怖いなあ。エリーの表情に怒りの表情が見えない。いやエリーの顔じゃもう表しきれないのだろう。証拠に、エリーの目元がびくびく動いて、唇の片方が妙につりあがってる。

「すみませんでした！！！」

「一真のばかー！！！！！」

あれ？名前呼びになった？そんな事思ってる場合じゃない！俺にめがけてとび蹴りが飛んできた。頭を下げて謝ったもんだから。避けるには体勢が悪い。半裸エリーのとび蹴りが俺のみぞおちに見事にクリティカルヒット。俺の体はノーバンで壁に背中から激突するという、漫画みたいな笑えない展開になった。こいつ、友里よりもタチが悪い。俺の意識が一瞬吹っ飛んだと思ったら、エリーの「フンッ！」とか言う声を聞いたと思ったら、ボタン！と大きなドアの開閉音が廊下に響いた。当分エリーに逆らえない。とんでもないじやじゃ馬娘だ・・・。俺は頭を抑えて大きく溜め息を吐いた。やっぱりこいつなんか泊めるんじゃない。俺の命は後何日持つだろうか・・・。

STAGE 3 (後書き)

会話ばつかだな・・・。

STAGE 4

結局俺がとび蹴りを食らって部屋を閉め出されたわけだが、このままでは俺は寝ることができない。というわけで、頃合いを見て、もう一度部屋に突入してみようかという算段を立ててみた。しかし、とんでもないダメージだ。こうなるくらいならかわしとけば良かった。俺は未だに痛む背中をさすりながら、階段で下に下りた。

こういうときにいつも悪いパターンが起きてしまう俺だ。

そう、こういうときにいきなりピンポンという愉快なインターホンの音が家中鳴り響いた。母さんはもうご就寝状態。こうなってしまうえば、地震が発生してもおきないもんだから、俺が出なくてはいけない。

「はあい・・・」

俺はやる気の無い声質で、インターホンに出た。

『か、一真。私』

「友里か？」

最悪だ。このパターンはどうしようもない。どうする？俺？とつとと友里を追っ払うというルートか？それか、正直にドストリートに全てを打ち明けるか。それが、うまく頑張ってはぐらかすか。

最初のルートならば、怪しがるだろうし、次に考えたルートを選べば俺の命は今後無いと思えばいい。じゃあ、最後に考えたルートを選ぶか。頼むぞ、エリー。ここでお前が出現なんかしたら、お前が知りたい情報が一気にパアだからな。俺は手を合わせて、神頼み。俺は玄関のドアを開けた。

玄関の前には友里が何かの小包を持ちながら俺の玄関の前に立っていた。

「なんだ？それ」

「これ、父さんが出張から帰ってきて、大阪からお土産だって。はい、たこ焼き」

天使のような笑みを浮かべながら友里が小包の袋ごと俺にそれを手渡した。袋からたこ焼きソースのおいがあふれ出てきた。ん？これはまずいよな。俺はたこ焼きの入った袋をぎゅっと締めて匂いが漏れ出さないようにした。友里にはこの行動の意味は一生分かるまい。

「それだけか？」

「うん、それだけ」

友里はゆっくりと俺を眺めるように俺の目を見てきた。その後、ふうつと息を吐き、友里は一步下がって、何も言わず手を振ってそのまま背を向けて、走っていった。

「……ん？なんだか、全てが安泰に済んだような気がする。何だかんだ言って、今回は運がよかったみたいだな。俺はドアを閉めて、袋の封を開けた。その瞬間袋にたまっていたソースの匂いが一気に飛び出してきた。エリーは果たしてこれに飛びついてくるのか？

「うわ！」

服を着替え終わったエリーが階段の下で、じっとこちらを見ていた。全く気づかなかった。すっごいじと目で俺を見ていた。こわあ。エリーからは恐怖心ばかりが植えつけられる。あれって不機嫌なのかなあ。俺はすぐすごと引き下がった。

「一真……」

「な、なんだ？エリー、俺をいきなり名前呼びとは、どうした？俺は顔を引きつらせながら聞いた。

「あれって？」

「ああ、あれは俺の幼馴染の小野沢友里。て、知ってるだろ？同じクラスだろ？」

「さあ、同じクラスの奴なんか興味ないし、あんまり顔も知らない」

エリーはぶいっとそっぽを向いた。

「そうか？じゃあ、覚えとけよ。あいつがヒステリックを起こし

たらどうしようもないぞ？」

「へえ、でもそんなのには興味ない・・・」

「おいおい・・・」

やばい。やばいぞ？この緊張感。バトル勃発か？俺は息を呑んだ。そろそろスタンバイしたほうがいいか？俺はひそかにポケットに潜ませていたPLDを掴んだ。

しかし、エリーは俺の予想を反して感情を制御して、大きく溜め息を吐いた。あつぶねえ。本当に命拾いした。

「まあ、いいわ。一真が誰を好きでいようと私には関係ないし」「そ、そうか」

俺は顔を引きつらせながら苦笑いを浮かべた。やっぱり友里にも正直に言ったほうがいいかなあ。俺に訳の分からん監視がついてしまったとか言う名目で、全部話しちゃおうか。

ん？さつきからエリーの視線がどう見ても俺のほうへ向いていない。エリーの視線をたどってみると、そこには俺が持っているたこ焼きの入った袋にたどり着いた。

「まさかお前以外に食いしん坊か？」

「ば、馬鹿！そんなわけないでしょ！」

エリーは顔を真っ赤にして俺に背中を向けた。しかし、それでも顔だけこっちに向けてしまう。やっぱり興味あんだな。俺は溜め息を吐いて、エリーにしゃべりかけた。

「分あったよ。興味があるんだろ？どうせ、友里は俺と母さんで食うだろうつて言う設定で持ってきてくれたんだろうつから、おれとエリーで食っちゃおうか」

その言葉にエリーは思いのほかのような表情を浮かべて、俺のほうへ振り向いた。全く、素直じゃないな、こいつ。俺は笑みを浮かべながら小さく溜め息を吐きながら、電子レンジのほうへ歩いていた。

「あ、あのさー！」

エリーが大きな声で俺を呼び戻した。

「ん？なんだ？」

「あんまり温めないで」

「お前・・・猫舌だったのか？」

「・・・・・・・・」

たしかこいつは「火」の性質カクストロフだったよな。たこ焼きの熱さより、断然お前が操ってる炎のほうが熱そうなんだけどなあ。てか、熱すぎて熱さも感じないんじゃないのか？

ま、体の内側だから、余計熱く感じるんだろうな。俺はそう思い勝手に納得して、じゃあ、振りだと思ってかなり温めてやるうと思っただ。

「あつっ！」

エリーがいきなり口の中をやけどした。しっかり冷ませよ。俺は苦笑いを浮かべて、エリーの口を火傷をしたときの顔が赤くなる様子を見ていた。

エリーはたこ焼きをほふほふと口の中で冷ました後、頃合いを見てしっかりと葉で噛み砕いて飲み込んだ。

「しっかり冷ませよ・・・」

俺はエリーに対して笑みを含めながら言った。

「あんまり温めないでって言ったのに・・・」

エリーはうつすらと涙を浮かべながらぽつと呟いた。そのままエリーは爪楊枝つまようじでもう一個を突き刺し、穴を開けて中に向けてふうふうと息を吹きかけて中身の暑い部分を冷ました。なるほど、なかなか考えたな。一番熱い部分をそういう風に冷ますなんて。ホントに考えたな。ま、俺はそういう風にしなくても平気だけど。

気づきゃあ、十個ジャストあっただけのたこ焼きが全部平らげられてしまっていた。時間かけたけど、エリーがなかなか食い終わらないしな。

「さて、エリー」

一夜明けた今日は土曜日で学校は休みだ。警部も来なければ、友里がいきなり乗り込んでくることも無い。いつもの俺なら平和な日だったということ、済むのだが、今日はそういうわけに行かない。エリーの仕事の手伝いをしなければいけない日なのだ。俺はいつもの普段着に着替え、エリーに向き直っていた。エリーは向こう側から転送してもらった普段着を着ていた。ハイネックの黒いトレンチコートに、小さいスカートをはいていた。後ろから見たらまず、そのスカートは見えない。黒いトレンチコートの下は、ノースリーブの赤い服だという、なんともラフな格好だ。どうせ下着も取っただろう？

「なに？」

「俺の性質カタストロフを調べるのはいい、戦闘を行うのもいい。けど、その敵がどこにいるかわかるのか？」

「わかる。お前のPLDは知らないけど、私たちのPLDは零れ者シラをサーチ出来る。ま、三百メートル以内なら反応するから、探すのは難しくないわ。ただ、あの狼型の零れ者ジャンクみたいにスピードが速いやつなら、すぐに三百メートル圏外に行っちゃうから意味ないけど」

「おい、そのまま言い続けたらその零れ者ジャンクとは戦えないってことになるぞ？どうするんだよ」

「そこは心配ないわ」

エリーは大きなため息を吐き、俺のほうへ向いた。

「そのためにジュールがいるんでしょ？」

「？」

俺が首をひねった瞬間、ピーとかいう機械音が俺のPLDから聞こえた。俺がポケットに突っ込んでいたPLDを取り出すと、縁にあるランプのひとつが赤く点滅している。どうするんだ？これ。

と思っただけだった。

『はぁーい！カーズマ！』

「ッ！」

びっくりしたあ。一瞬心臓が止まるかと思った。いきなりPLDから声が聞こえるんだからな。エリーは大きく溜め息を吐いた。

「ジュール、一真がびっくりするでしょう？」

『ごめんごめん。やっと繋がってくれたからうれしくて興奮しちゃってネ。じゃあ、自己紹介からネ。あ、カズマは良いよ。エリーから全部聞いたから。ボクはジュール。エリー及び、キミのサポートブレインだよ』

「俺の？」

「ウン。総長が、キミを勝手にPPAに入れる！とか喚き散らかしてたけど、そんなこともいかない。だってキミは現実側リアルの人間。でも、キミは観察対象だから、目を離すわけでもないし、戦闘力も高い。で、サポートぐらいはと思って、君のサポートブレインを勤めるんだヨ。エリーの勧めでネ』

「ジュ、ジュール！」

エリーが俺のPLDの向こうで爆弾発言をした(？)ジュールに向かつて吠えた。こいつ……。全く、余計なことしやがって。

俺はエリーの噛み付くような横顔を見て、口元で笑った。

『まあまあエリー。それだけエリーがカズマを大切にしていることは分かったから』

「べ、別に大切ななんか思っていないから！」

エリーが顔を赤くして俺のPLDから顔を離れた。向こうではジュールの苦笑いが聞こえる。こんなにはつきり聞こえるもんなんだな、無線って。

「で、ジュール。反応はしっかり追ってくれてる？」

『もちろん。ボクはその手の話題には強いからネ。君たちの地点からは言うほど遠くない。むしろ馬鹿なのか君たちのほうへ一直線だね。ただ、スピード結構速いからすぐに会えるんじゃないかな？』

「じゃあ、外に出たほうがいいって訳ね」

『まあ、そういうことになるネ。ほら、早く外に出ないと。境界パラドックスが発生してしまうヨ?』

「うん。一真行きましょ」

「行くってどこへ?」

俺には話の筋が読めない。どこに向かうんだ?

「決まってるでしょ! 零れ物ジャンクがこつちに向かつてる。戦うなら外のほうがやりやすいでしょ?」

「出るだけか?」

こんなこと俺が聞くもんだから、エリーは冷たい目を俺に向けてきた。

「何言ってるの? 聞いた? さっきの話し。わざわざこつちに向かつて来てくれるのよ? 向こうが私たちの半径二百メートルに入った途端、境界パラドックスが発生するの。そうやって周りの建造物とかを守ってるのよ。でも、その空間では時間が止まるから、時間が進んでる私たちはそれに干渉することができない。こんなところで閉じこもってたら出れないわよ? て、昨日言ったんじゃない? 私」

「う……」

言っただけ? 言っただかどうが忘れた。

「とりあえず!」

エリーは俺の前に立ち上がった。

「早く出るわよ! お前も知りたいんでしょ? 自分の正体を」

「……」

その通りだ。そうでなければなんで俺はこんなじゃじゃ馬娘を俺の家に入れたんだ? 俺はエリーのようにPLDを腕に付けて、エリーが走って出て行った後を追った。

『準備はいいカイ?』

「ええ、後どんぐらい?」

『あと五秒』

四・・・三・・・二・・・一・・・。

その瞬間、俺の視界がフラッシュバックを起こした。あの時と同じ感覚だ。確かあの時は・・・。

フラッシュバックがなくなったら俺の視界全体は黒ずんでいた。景色も、全部がだ。それが、全ての時が止まった合図だった。

その中で唯一動けるのは俺とエリーと、後は・・・。

「来たようね」

エリーがそう言うと、それを合図だったかのように上から俺たちの前方十メートル先で何か落ちてきた。

「何だよ！何なんだよ！ここは！何で時間が止まってんだよ！」

俺たちの目の前に居たのは水色でウサギ型の明らかに俺とエリーよりもサイズが小さい零れ物だ。いや、こいつは確か・・・。

「【イラビット・チルドリオン】か？」

【イラビット・チルドリオン】。確かこいつは「フォーリング・ダンス」の最初のクエスト四つの内の一体のボスだったな。

「うげえ！俺の名前！？すげえ！俺ってすげえ！そんなに有名なのか！」

「うっせえなあ。子供声ではしゃぎ回りやがって。確かにこいつはスピードあるなあ。アステスよかましかだったけどな。なあ、エリー」

「そうね。ここで黙らせときましょ。まあ、まだ何にもしてない駆け出しだけど、ここで摘んでおきましょ」

エリーは目をつぶって溜め息を吐いた。

「そうだな」

俺は自分の左腕にはめてあるPLDに目を向けた。そういえば、どうやってあの剣を出すんだ？

「おいおい！俺は放って置きか！？そんなことするお前たちは、処刑だ！！！」

チルドリオンがいきなり高く飛び上がった。そういえば、こいつの本当の自慢はジャンプ力だったな。なるほど、等身大だとこんな

に高かったのか。俺の身長の高さ五メートルぐらい高くまで飛び上がっていた。

俺はそんな感嘆の感情を持ちながら、それを見送っていた。

「一真！何してるの！見とれてる場合じゃないでしょ！」

エリーは俺を思いっきり蹴飛ばして、チルドリオンの空中からのジャンプの衝撃波の射程外に飛ばしてエリーもその反動でチルドリオンの空中からのキックの衝撃波の射程外へと飛び出た。チルドリオンが思いっきり強く着地した地点からは、強い衝撃波が発生して俺の前ギリギリで消滅した。危ねえ。そんで持つて痛い。ホントに思いっきり蹴飛ばしやがったなあいつ。ま、そのおかげででかいダメージは防げたけど……。

向こうに居るエリーは自分の右手にあのバスターソードを出現させた。どうやって出すんだ？あれは。あれが無ければ出しようもない。

「PLDの脇にあるレバーを自分のほうへ引いて！そしたらあ那时的武器を思い浮かべて！それだけであのときの武器が出てくるから！」

レバー？これのことか？PLDの脇にちょうど指が入るような大きさのレバーがあった。これを引くのか？

俺はエリーの言われたとおり、そのレバーを引いた。

Link START

あの時と同じだ。俺の頭の中でそういう機械音が聞こえたと思ったら、俺の体のうちから何かの力が入ってきた。

「やるなあ！お前ら！もういつちよ行くぜ！」

チルドリオンがエリーに向かって水平ジャンプした。このパターンはまずい奴だ。

「エリー！」
俺がエリーの名前を叫んだとき、エリーの呟き声が聞こえた。

CODE FLAME

エリーの髪型や瞳の色が赤色に変色した。そして、紅蓮の炎がエリーの回りを取り囲み、その炎がチルドリオンの突撃からエリーの体を守った。守ったというより、その炎がチルドリオンをくるみ、そのまま弾き飛ばしたというのが正しい。チルドリオンは激しく地面に打ち付けられ、立ち上がるには時間がかかった。そういえばこいつはひるむとなかなかリカバリーしなかったな。

その間にエリーは俺に目配せをした。そうだったな。今回はこいつをただただ倒すことが目的じゃないもんな。俺はすつと目を閉じてあのときの武器を思い浮かべた。白く光ったり黒く光ったりする刀身を持った片刃剣。俺の意識の呼応して、激しく光る刀身。そう俺が想像すると、俺の手元に粒子が集まってきた。そして、それがあのときの片刃剣を形成した。俺はその剣の黒い柄を掴んだ。その剣はあの時と同じように黒く、白くと交互に発光していた。たぶん、エリーの言うように俺の右目には紋章が浮かんでるのだろう。(俺にはわからないけど・・・)

「おいおい！お前ら！二対一かよ！どういう了見だよ！」

「気にしないで、お前の相手はあいつ。私は手を出さないわ」

エリーは手に持つてるバスターソードを消滅させた。それでも尚エリーの髪の毛の周りには火の粉が飛び散っていた。

そうだったな、エリー。今回はお前の仕事協力だ。これで貸し借りは無しだぜ。俺はこちらに振り向いてくるチルドリオンに焦点を合わせた。チルドリオンは体を上下させて呼吸を整えているようだ。ていうか、プログラムにそんな呼吸とかあるのか？

「なんだよ！そうだったのかよ！じゃあ、お前からだな！」
単純な奴だな、こいつ。エリーの言葉を一切疑わない。ま、疑わなくて正解だけどな。

チルドリオンはエリーの時みたいに水平ジャンプで俺に向かって一気に距離を詰めてきた。こいつは水平ジャンプで一気に距離を詰めた後、「ダイヤモンドソニック」というまっすぐ飛ぶ広範囲の真空波を飛ばしてくる。水平ジャンプを回避するのは難しい。だったら今やることは……。

「吹っ飛べ！」

チルドリオンが俺の目の前に着地するや否や耳の部分に青白く光らせた。これを待っていた。こいつがそれを発動するときは約一秒のインターバルがある。それを狙って、背後を狙う！俺はチルドリオンが技を発する前に、俺はジャンプした。

「うわ！」

思ってる以上にとんだ。人間のパワーの限界をぶちぎっている。そういえば、エリーはあの時こんなこと言ってたよな。

私もパラレルリンクしなきゃ運動能力が急激に落ちるって事を！

そう、逆に言えば、パラレルリンクすれば運動能力が急激に上がる。それだけじゃない。エリーはあのアステスの巨体を蹴り飛ばした。俺もかなり遠くまで蹴り飛ばされた。つまり、運動能力だけでなく、筋力も常人以上にいっきに跳ね上がるというわけだ。俺はチルドリオンの背後に着地して、チルドリオンが技を発動する前に一発入れた。ガインツ！という金属音が響いた。

よし、後一発だ！と思った時だった。チルドリオンが俺のほうへ向いた。

何でだよ！何でこっちに振り向けた！？

「吹っ飛べって言ってんだろっ！」

「クッ！」

俺は攻撃を無理やりキャンセルして、ジャンプした。しかし、俺は気づかなかつた。俺がかわしたらエリーに直撃してしまう。しかも、エリーはそれを腕を組んで観察するように見ていた。

「エリー！」

「来なくてもいい！」

「食らえ！」

チルドリオンの耳から大きな衝撃波が発生した。くそ、間に合わねえ。そのとき、エリーがまた呟いた。

CODE CRIMSON

その瞬間、エリーの炎が激しく燃え上がり、炎が翼を形成してエリーの手元にはバスターソードではなく、綺麗な反りを描いた日本刀が手元に握られ、柄から刀の峯に銀色の装飾が付けられ、刀身には炎が帯びられている。髪の毛の周りに飛び散る火の粉もさっきよりも多くなっている。

「言っただろ？お前の相手はあいつだ」

エリーは刀を軽く一なぎしてチルドリオンの真空波を縦に切り裂いた。

あいつ、あんな物も隠し持ってたのかよ。エリーは赤い瞳でチルドリオンを見下げていた。

「もう一度言う、お前はあいつを相手にしてる。あいつを倒せたのなら、今度は私が相手してやる」

エリー、お前かっこいいよ。女でかっこいいって思うのは友里以外ないと思っていた。しかし、今のエリーは確かにかっこいい。

俺は口元で笑いを浮かべた。

（わあつたよ。お前は完全無視でいいんだな）
すると、俺の頭の中で俺の声で呟きのような声が聞こえた。

ダイヤモンドソニック

あの時と同じだ。俺の体が意識から切り離されるような感覚が出てきた。俺が剣を上に掲げると、剣に青白い光が発光した。

「え？あれって・・・」

エリーのそんな呟きが聞こえるが、俺はその声に反応できない。体が言うこと聞かない。

俺はその青白く光る剣を斜めまっすぐに振ると、真空波が発生してそれがまっすぐにチルドリオンに飛んでいった。真空波が飛び立つと、俺の意識は一気に体の中に戻った。

「終わるか・・・」

俺が呟くと、チルドリオンが真空波で傷ついた身をかがめた。

「ぐぐ・・・」

おい、これって、あの時と同じパターンか？たしかアステスもこの後・・・。

「ぐガアアアアアア！」

チルドリオンを中心に突風が巻き上げられ、俺が放った真空波が失速した。

「グガア！」

チルドリオンがノーロスでダイヤモンドソニックを発動して俺の発したダイヤモンドソニックを相殺させた。それどころか、その真空波はそれを食い尽くして、俺に襲ってきた。

「クッ！」

俺は高くジャンプして、その横長い真空波をかわした。真空波は

俺の下を通り過ぎて民家の石垣に直撃し、大きな煙を上げた。しかし、石垣には傷一つかない。こちらからは時が止まった物への干渉ができないからだ。この境界は便利だパラドックスなと思いつながら俺は真空波の着弾点を見据えた。

「ガガアアア・・・！」

チルドリオンは完全に暴走している。アステスと同じだ。あいつも身の危険が迫るとなぜか暴走をしてパワー、フィジカルが共に高くなった。こいつは多分それよりタチが悪い。暴走の仕方**も**仕方だ。いま俺の目の前にいるチルドリオンはやたら滅多に周囲にノーロスのダイヤモンドソニックを振りまいている。これでは近づけない。どうする。どうすればいい。するとチルドリオンはいきなりエリーに向けてフルパワーのダイヤモンドソニックを放った。俺のを相殺させたのとわけが違う規模の威力だ。

「エリー、かわせ！」

「・・・・・・」

全く返答は無し。代わりにエリーは天に刀身を掲げた。するとまたあの時みたいに刀身全体に炎が纏われた。

そして、それをX状に空気を切り裂き、炎はその後を追うようにX状に空中に残った。

ヘイトフレイム

エリーは空中に浮遊しているX状の炎を横殴りに切り裂き、炎は切り裂かれること無く、X型の炎はダイヤモンドソニックを食いつくし、そのままチルドリオンの方へ高速で迫っていった。あの時、アステスは直撃した。これを食らって無事で居られるはずが無い。ましてや強くなったエリーのこの技を受けたらもう即死だろう。

しかし、今回はそうはうまく事が運んでもらえそうに無い。チル

ドリオンに直撃するかと思いきや、いきなりチルドリオンの体が消えた。理屈ぬきで消えた。俺のこの目でも見切れなかった。なぜならいきなり、エリーの体が吹っ飛んでいたからだ。

「ぐっ!?!」

エリーの体は何バウンドした後そのまま地面を滑っていた。

「エリー!」

エリーは苦悶の表情を浮かべて、立ち上がった。チルドリオンが上空から俺に向かって落ちてきた。これを食らったらやばい。絶対だめだ……。

俺はチルドリオンが着地する地点から大きく三度バックジャンプした。チルドリオンが地面に落下すると、ドガンツ!と言う規模の違うような爆音が俺やエリーの耳の鼓膜を震わせ、衝撃波の余波である突風に俺の体が大きく吹っ飛ばされそうになった。

「クツ!エリー!これはどういうことなんだよ!」

「分からない!暴走してとんでもない力になってるのは確か!でも、なんでだろう?この前もだけど、こんなこと二度続けて起きるなんて……」

エリーの炎は今でも激しく燃え続けていた。手に持っているのは銀色の刀身をした日本刀なのも確かだ。この状態のエリーはいつもより数倍の力を発揮できるのだろう。しかし、そのエリーでさえも苦戦を強いられるなんて……。

チルドリオンってこんなに強かったけ?確か、俺はこいつを一分足らずで倒したはずだ。それが本当に戦ってみたら、十分も経っている。多少は時間がかかるだろうが、こんなにもかかるなんて思ってもいなかった。なんだ、なにがおかしい?俺はチルドリオンが立ち止まっている隙に、そのチルドリオンの体中を見回した。

「ん?」

なんだ、あれ。右目に紋章が……。そういえば、いまの俺の右目にも紋章が浮かんでるんだよな。

「エリー!」

「何よ」

「チルドリオンの右目に映ってる紋章、俺のと同じのか？」

「紋章？」

エリーもじつとチルドリオンの右目を見つめた。

「色は違うけど、うん。形は一緒。それがどうかしたの？」

「いや、なんでもない」

まさかな。俺の力とこいつの暴走が結びつくはずが無い。なんて
って俺は現実側^{リアル}の人間だ。あいつの意識への干渉の方法なんか知る
はずが無い。

「グガアアアアア！」

「喚くなよ、小さな奴」

俺はやたら滅多に暴れまわっているチルドリオンのほうへ向き直
った。見ていて苦しい。あいつの暴れ方を見ていて虚しく、苦しい
だけだ。終わらせてやるよ。俺の手で。【殺し神】として。

また、俺の意識が体から切り離された。

俺は剣を高く掲げた。その刀身に、真っ赤な紅蓮の炎が纏われる。

「か、一真？それって」

そう、この技はエリーにとっては親しみ深い技だ。しかし、この
技は俺の意識を完全に無視して発動される。

「どけ、エリー」

今度は俺の口が思い通りに動いてくれた。

俺はその炎が纏われた刀身をX状に振った。炎が空中に残留し、
X状をかたどっていた。この技は……。

ヘイトフレイム

俺の頭の中でこの技名が呼ばれた。俺の体はそのX状に残留した
炎を切り裂くように斜めまっすぐに薙ぎ、炎をチルドリオンのほう

へ飛ばした。高速で飛んでいく炎は、チルドリオンを直撃した。高い火柱が立ち、しばらくすると、俺の体が剣をブンツと無造作に振り、炎をかき消した。火柱が消滅した地点にいるチルドリオンはふらふらと揺らめき、虫の息の状態だ。しかし、「グググ・・・ガガアア」チルドリオンは今も尚暴れようとする。俺はあのとときの動きを思い出しながら体勢を低くした。剣を逆手で持ち、両目の焦点を一気にチルドリオンに合わせた。そして、剣が細かい振動を放ち、俺は人間の脚力の限界をぶっちぎったスピードで迫った。

ソニックブレイド

俺は頭の中でその技名を浮かびあげ、チルドリオンを真っ二つに切り裂き、俺はチルドリオンに背を向ける形で、体勢を戻した。

「ググググ・・・ガアアア・・・ッ！」

バキンツという音と共にチルドリオンの体が結晶と化し、そのまま、粒子となって崩れ落ちて消滅した。その粒子は、勝手に俺のPLDの中へと入っていく。俺は口元で笑いを浮かべ、PLDを見つめた。

（当分ゆっくりしときな）

俺は後ろへ振り向いてエリーの顔を見つめた。エリーは今も尚驚いている。そりゃそうだろうな。俺がヘイトフレイムを発動したからな。

「一真・・・」

エリーがそう呟いた途端、突然俺の視界がフラッシュバックを起こした。そして、風景全体が元に戻り、エリーの髪の色と瞳の色も元に戻り、全部の時間も進み始めた。しかし、俺とエリーの沈黙は破れない。

「どうした？」

俺は無理やりこの沈黙を破った。

「いや、何だろ……。いつの間に、ヘイトフレイムを？」

「その質問答えれない。俺だって何でか分からない」

俺は鼻で大きく溜め息を吐きながら、エリーのほうへ歩いていった。

「でも……」

「でも？」

「俺が普通じゃないのは分かった」

「そう……」

俺はエリーの肩をポンツと叩き、家の中へと向かった。

あり得ないことが、エリーの眼前で広がってしまった。一真が、今回見た技を全てコピーして、自分の物にしてしまった。エリーは歩き去っていく一真の背中を目で追い続けた。

(なんなの？あいつは……)

そう思った途端、エリーのPLDが鳴った。無線の音だ。

「なに？ジュール、何か分かった？」

『分かったよ。でも、これは君にだけ伝えておく』

「何で？」

『まあ、落ち着いて聞いて。彼には性質カタストロフが存在する。それは当然

り前だよね』

「まあね」

エリーは小さく溜め息を吐いた。分かりきってることを……。

『で、彼の性質カタストロフは風・林・火・山・雷・陰どれにも属さない、これも言ったよネ』

「早く、何が分かったか言って！」

早く早くというエリーの心がどんどん急かしていた。しかし、後になって聞くのがいやになると言うことはこのときは知らなかった。『じゃあ、言うよ。』仙上の意思に背き、天上の域にたどり着く

者」・・・」

ジュールがそう呟いた。

「ねえ、何言ってるの？」

「この言葉が、彼の正体の鍵のひとつだよ。ずいぶん調べまくったヨ。すると、古いデータファイルから、こんな言葉が出て、それがカズマの正体を記してたんだ」

「何なの？一真の性質は」

エリーは離れていく、一真の背中を見ながら、ジュールの言葉を聞いた。

『桐ヶ谷一真の受け継いだ性質は、カタストロフ「天」だよ、エリー』

STAGE 4 (後書き)

長いから少しグダッてるかも知れないな・・・。
無駄に長くてすいません・・・。

STAGE 5

「よっしゃあ！今日は仁舞高校空手部夏合宿御定番！肝試し大会の始まりだあ！」

仁舞高校空手部は毎年春夏秋冬、つまり、一年に四回の合宿をしている、というのが御定番だ。今年もあるうことか、しっかりスケジュールにあわせてこの夏に合宿をしている。しかも、最初の夜に肝試しをするという、御定番があった。

今年はずいぶん張り切ってるようで、男子空手部主将、荻原健吾おぎはらけんは肝試しの舞台である山荘にあった廃校となった校舎の前で、片手をビツと挙げて他の部員たちを決起させた。もちろん、女子も参加必至。

つまり、この中に異常に嫌がるような奴がいたりすることだ。

「や、やめようよう。なんか、不気味だし・・・絶対なんか出るとてー！」

女子空手部主将、小野沢有里だ。身を小さくし、潤んだ目で荻原のほうへ向いて体をぶるぶると震わせていた。この女の子だけはどうにも他の部員よりも異常に嫌がる。他の女子は怖がりはあるが、ここまで異常にならない。

「大丈夫だって、友里ちゃん！今回は去年みたいな二人一組じゃなくて、五人一組で行くからな！」

荻原はこういうが・・・。

「大丈夫だって、健吾君が怖いからでしょ！去年私を放ったらかしにしたくせに！」

友里がこんな激昂するもんだから、荻原は苦笑いを浮かべるしかなかった。と言うより、あの時は学校近くの合宿所に寝泊りになって、その近くにいる墓地を肝試しの舞台にしたのだが、思ってる以上に怖く、男子でさえ逃げ出すような状態になって笑えない展開に

なつてしまった。

あの時桐ヶ谷一真が言うように本当に見てしまったのだろう。友里にいたっては置いてけぼりにされた拳句、身がすくんで一切動けない状態になつてしまった。なかなか友里が帰つてこないもんだから、急遽桐ヶ谷一真にヘルプメール。

おかげで、高く値段をぼったくられ、しぶしぶやつて来た一真はなんのそのと墓地に軽い足取りで入って行き、しばらくして一真は友里を励ましながら連れて返ってきた。あいつは鉄の感情の持ち主だ、と空手部総員が思っただろう。しかもスポーツセンスははずば抜けて、勉強にいたつてはテストを百点以外取つたことの無いとか言う。しかも、顔立ちが整っているイケメン面、もうどこ叩いていいか分からない。叩くといえ、超ゲーマーな事と、トンでもない毒舌家だということぐらいしか見当たらない。しかし、女子達からしたらそれがいいらしい……。

しかも、荻原は一真と小学生のころからの親友だ。到底悔れない隙を見せたら、そこにここぞと集中攻撃だ。今では截拳道の名手。一回手合わせしたことがあるが、全部の攻撃をひよひよいかわされて、拳句の果てには自分の体力は限界のさなか、一真に一発も食らす事ができず、一真は全く飄々とした表情で荻原を見下ろしていた。

あんなキザな野郎を思い出すだけで、無性に腹立つ。そんな自分を疑念視している荻原も居るもんだから、荻原自身は今にも頭を抱えて叫びたくなつてきた。しかし、そんな事後輩やらたくさん居る中で、そんなことする訳には行かない。しかも、ましてや空手女王の小野沢友里のすぐ傍だ。もし、そんな思い悩むような行動に出れば、友里が真っ先に一真にヘルプメールを送り、また一真は部員全員のお小遣いからトンでもない額をぼったくる。もう見え見えのパターンだ。

荻原は金髪の髪型をなるべく乱さないように後頭部あたりを人差し指で搔いた。そして、荻原は手をパンツ！と叩いた。

「よし！じゃあ、決起が終わったところで、突っ込むぞー！」
「いきなりかよ！」

どこからとも無く、と言うより男子空手部全員に言われた。それもそうだ。まだチーム決めが終わってない。相当テンパッているのが分かった。女子全員はそのポケー人突っ込みそれ以外のコントを聞いて、肩をがっくりと落としていた。

しかしただ一人、全く無反応状態で体の形が変わらない奴がいた。
(行くなら皆が良かったなあ・・・)

友里はそう思いながら、溜め息を吐いた。

「友里」

後ろから肩を叩かれて友里は後ろへ振り向いた。

そこには茶髪のストレートのショートヘアの御堂綾香みとうあやかが友里を引き寄せた。

「な、何よ・・・」

「何よじゃないでしょ？変だよ、傍から見ても。うじうじしちゃって」

「仕方が無いんでしょ！怖いんだもん」

友里と綾香は声を殺しながら話し合いを始めていた。綾香は険しい顔に、友里は必至に返すように綾香の険しいその顔に噛み付いた。

「そんな事言ったら、一真君に見切られちゃうよ？」

「・・・」

何故か友里の顔が真っ赤になった。結構友里の胸に来たようだ。

そして、綾香はそれにここぞとばかりに言葉の攻撃をぶつけて集中攻撃を仕掛けていく。

「分かってるよお。友里、一真君のこと、好きなんですよ」

トンでもない爆弾攻撃だ。原爆のリトルボーイ級の威力を持った言葉の攻撃が友里の胸に突き刺さった。

「ば、バカね！私、そんな事思ってるわけ無いでしょ！一真だつて・・・」

「一真だって、なんて？」

「一真だつて・・・そんな事思つてないだろうし・・・」

友里の顔がみるみる内に赤くなつていく。友里の胸が強く締め付けられたような感触がした。なんだか、そんなこといって何だか胸が締め付けられるような感じがする。

どうしよう・・・もし、本当に一真がそんな事思つてたら・・・嫌われてたら・・・。

「友里？目が潤んでるよ？」

「へ？」

友里ははつと気づき、瞼を一指し指で拭いた。人差し指に湿つた、そして冷たい感触が触れた。 (涙・・・?)

はっ！として、友里はもう一方の目の瞼を拭いた。そこにも涙が・・・。

(私、こんなに・・・?)

友里は涙がついたその指を覆い隠すように手を握つた。友里は自分の気持ちに驚いた。一真に嫌われると考えるだけでこんなにダメージが来るなんて・・・。そりゃあ、幼稚園からずっと一緒にいる幼馴染だからつて、こんなにもなるなんて・・・。

横では綾香がふうつと息を吐いた。もうこれ以上追求しないでおう。これ以上やったら本当にいじめになつてしまう。

「じゃあ、周り五人勝手にくめえ！それが今回のグループだあ！」

「ざつっつ！！！！！」

男子空手部全員に一気に突っ込まれる荻原もなかなか面白いものだった。漫才集団みたいな男子空手部と、おしとやかな女子空手部はこの後、トンでもない地獄絵図を見る羽目になつた。

しかし、このときはまだ全員知るわけが無かつた。

STAGE 6

「だから一真！助けて！」

「いきなり、んだよ。朝ぐれえ静かにゲームさせてくれよ」

俺は友里にいきなりの依頼内容なんか聞いてちやいなかった。ていうか聞く気すらない。先週はせっかくエリーの仕事を手伝ってやったってのに、あいつなんて言ったか分かるか！？

お前なんか言うことは無い！

んにやる・・・自分はいくらでも知れるからって調子乗りやがって。俺の右前の席にいるエリーは相変わらず、本を読んでばかり。なんだか、冷たい空気が見える。あのときの戦いの時はせっかくかっこいいって思ったのに、今に至っては高飛車なじゃじゃ馬娘だ。昨日に至っては・・・。

ちよっと、この町を案内しなさい。

命令かよ。もう俺の事なんか奴隷レベルだな。最悪だ。俺がいつもフィニッシュするからやいてんのか？俺はゲームから目を離し、エリーの背中をにらんだ。しかし、それすらも物怖じないかのよう。に、エリーは全く動かない。たぶん、俺のこの鋭い視線には気づいているのだろう。

「一真！」

「うわっと！」

ここにもいた、じゃじゃ馬娘！つたく、俺の周りにまともな女は集まんないのかよ。困った体質だなあ・・・これは。危うくPMPを落としそうになった俺はPMPをあわててキャッチ、そして背筋を伸ばして友里のほうへ向いた。俺の目の前にいる友里は口に形を「へ」の形にして、俺を険しい目でにらんでいた。そして、じと目になって俺の顔に近づいた。いや、友里さん？マジでめっちゃ近いんですが？俺の心臓がとんでもなく速くて激しいビートを叩いた。何だか俺このごろポーカーフェイスでいられなくなってる気がする。

・・・

「また、えりちゃん見てたでしょお」

「はい？」

「何だか一真ずっとえりちゃんに見とれてばかり・・・」

「あ、あのな、友里。そんな悲観的にならなくても？」

「私よりもえりちゃんのほうがいいんだ」

もう泣きそうになってやる。

「えりちゃんの頼みごとなら何でもOKなんだ・・・」

「んな訳ねえだろ！」

俺はガタツとゲーム放つたらかして、立ち上がって、友里に向かってほえた。

「俺は誰も好きになるわけでもねえし、好きになれる筋合いも無い！だいたい、俺はんな理由で依頼選んでるんじゃねえんだよ！勝手に悲観的になってんじゃねえぞ！」

俺はずいずいと友里のほうへ寄っていった。

「か、一真？近い・・・」

友里は顔を真っ赤にして、俺の顔を見上げていた。ん？そういえばこの態勢結構危ないな。俺はすぐに体勢をすくつと戻した。危ない危ないあんな至近距離に近寄つたら傍から見たら俺と友里の関係が疑われる・・・いや、疑われる内容なんかどこにも無いけどな？

「で、一真は受けるの？受けないの！」

「受けないって言ったら、お前俺を攻撃だろ？わあつたよ。しょうがねえなあ。依頼料はしっかりとるからな。わかつたな？」

「分かつたてば」

友里は口を尖がらせて、俺から目をそらせた。

さて、学校を俺たちは早引きをして、その現場に向かった。電車に一時間ぐらい乗って、山道を三十分歩いて、ようやく現場にたどり着いた。すげえな。確かに見た目は何か出そうな雰囲気だな。俺はその現場となった廃校の建物を見あげた後、俺は友里と逆方向

に目を向けた。

「なんで、お前もついてきた・・・エリー！」
「なんで？なんでだよ！何でこいつまでも・・・。」

突然横入りすや否や、しかも俺と友里の間に割って入ってきて、
こんなこと言い出しやがった。

「私も行きたい！私も連れてって！」

お前なあ・・・。ただでさえお前と俺の関係を勘ぐってきてる友里の目の前でそんな事言い出したら俺の立場が本当に危くなるぞ？どうすりゃあいいんだよ、俺は。ここで断るべきか？そう、ここは断るのが正解だ。もう関わるな、エリー。

「あんまし喋ったことの無い奴なんか連れて行けるか。場合を弁えろ、新人」

「そ、そんなあ」

エリーはぶうつと頬を膨らませて俺をにらんだ。なんだ？こいつ。また演技か？悪いが俺はその手には強いって自身があるんだよ。だから、そんなことして、俺を落とそうなんて思ってたんじゃないぞ。

「そんな顔したって連れて行かないもんは連れて行かない！だいたい、お前はこんなことするぐらいなら他にやることあるだろうが！それぐれえ早く分かれ！んな事も考えねえのかよ！」

「う・・・ぐ、ご、ごめんだぞい・・・」

目いっぱい涙を浮かべ、とうとう泣き落とすと来やがった。どこまでもしつこいなあ！俺はんな手に乗らねえからな。俺は次の手を考えた。さあ、どうやってこいつを引き剥がした物が・・・。

「一真！！！」

「ぐわっ!？」

横から友里のどかい怒声が俺の耳に飛び込んできた。耳イッテエ。友里のほうへ向くと、すごい形相で俺を睨んでいた。これはマジでまずいパターンだ。あんましあってはいけないパターンだということ

とがすぐに分かった。

「一真言い過ぎ！えりちゃん可愛そうじゃない！そんな言うこともないでしょ！」

「お前なあ・・・こいつは関係ないだろ！一番の部外者だろうが！」

俺はエリーのほうへビシッと指を突き刺して、友里に噛み付いた。

「私は、一真の言い方があまりにも乱暴だつて言ってるのよ！相手は女の子よ！一真の言い方はあまりにも言い過ぎなの！」

「どこがだよ！お前にだつてあんぐらいきついだろ！俺は誰だからきつくするのは嫌なんだよ！」

「私とえりちゃんは関係ないでしょ！一緒にしないで！一真がえりちゃんをそんな風に言うんだつたらえりちゃんも連れていこ！じゃないと可愛そうでしょ」

と言うわけだが、なんだよ、この空気。友里と俺の会話はあった、俺とエリーの会話もあった。でもエリーと友里の会話なんか一切なかった。メチャクチャキグシヤクしてるな、この二人。すっげえやりづらい。俺はエリーのほうへ向いて、エリーの顔をうかがった。この幽霊校舎をエリーは不思議な物でも見ているかのような目ですつと見上げていた。そっか、こいつにはこういうのは初めてなんだな。案外知らないことのほうが多いのかも名。

「んじゃ、じっくりと観察と行きましようか」

俺は息を小さく吐いて先へ進んで、俺だけが歩いて、背後の二人は付いてこない。

「どうしたんだ？二人とも。行かないのか？」

「は、入るの？一真・・・」

友里は震えながら聞いてきた。

「は？」

マジでは？だよ。何分かりきつたこと聞いてんだか。あまりにも

非常識すぎる。

「つたりめえだろ？じゃなきゃここに来た意味ねえだろ？」

「そ、そうだけど……。一真ひとりで行って来て！」

「はあ？」

とうとう訳の分からんこと言い出した。俺は後頭部をがりがり搔いて、友里のほうへ目を細めて向いた。

「お前なあ、依頼してきたのはお前だろうが。依頼人が現場まで案内するんがふつうだろ？それか何か？怖いからか？」

「……………」

すっかり黙った。こいつ、やっぱり怖がつてんのか？

「お前なあ、ここは墓場でもなければましてや今は夜でもない。

この前幽霊が出てくるメカニック教えただろうが。それでも怖いのか？」

「で、でも見たんだもん！開かないドアのぞき窓の奥でキラリツて光る何かが！きつと山姥だよ！山姥が包丁研いでたんだよ！ここに住み着いてるんだよ！」

「バー口、んな訳ねえだろ。現代科学が纏わり付くこの世界で、お化けやら妖怪がいるわけがねえだろ」

まあ、向こう側の奴は何でかここにいるけど。実際俺達の目の前に……。俺はエリーの顔をうかがった。エリーは友里の顔を見上げて、その後俺のほうへ向いた。

「はあ、分かったよ。俺に引つ付いといてもいいから、しっかりお前が山姥を見たとか言う場所まで案内しろよ。それとエリー！」

「な、何？」

いきなり話を振られてエリーは本当にびっくりしているようだ。演技……。じゃないよな？

「お前も付いてきたんだ。お前も、俺の仕事手伝ってもらうからな！」

「分かってるって！」

今度は演技だな。明るさが異常だ。いつものエリーじゃないから

すぐ分かる。ま、いつもあんなエリーを見てたら俺は持たないし、何より友里はびっくりだ。意識が持っていかれるだろう。

「んじゃ、今度こそ本当のスタートだな」

友里は俺のすぐ背後に付き、エリーは俺から少し離れてすぐ後ろを付いてきた。

確かに、何かでそうなぐらい暗かった。もう夕方近くだからって言うこともあるが、窓には中が見えないように黒いフィルターが貼り付けられていた。外はあんな明るいのに、俺の時計に入ってるLED発行ライトを点けて足元を照らすなんて、なんだか変な感じだ。変な感じ……。

「お前らな……」

俺は横を見た。

「何で俺の腕にしがみつくだよ二人して」

「だ、だつてえ」

「こわいもん……」

友里は目を潤ませて、エリーは俺から目をそらせて口を尖らせてどっちも頬を赤くして言った。エリーは俺の左腕に、友里は俺の右腕にしがみ付かれてるせいで両腕共に自由が利かない。腕をブランブランにするとなんだか変なバランスになってしまうので、両腕共に俺のズボンのポケットに突っ込んでいた。

友里ならまだしもわかる。しかし、エリー、お前はもつと怖いもん知ってるだろ。お化け怖かったのかよ。お前それ演技じゃないよな？どう見ても。俺は左右の少女お二方を目に映らせた後大きく溜め息を吐いた。

なんだよ、この漫画みたいな展開は……。変なの。名探偵コナンにもシャーロック・ホームズでもこんな展開なかったぞ？

やっぱり似てるだけか。俺とその探偵たちは。俺は頭の中にかつて憧れていた探偵たちの顔を思い浮かべながら首をかしげた。

「あ、一真そこ！」

友里が俺の体越しにある一つの部屋の扉である鉄製の扉に指を指した。俺はその鉄製の扉に時計型LEDライトの明かりを当てた。まずはドアノブに明かりを当てるのが普通だ。左向けのレバー型のドアノブで、下にくの字型の鍵穴があるタイプだった。俺はそのドアの前に立ち、ドアノブに手を掛けた。

「あれ？」

動かない。ドアノブが回転しない。ガチャガチャと言う錆びたような音がして全く動かない。俺は全体重をドアノブに掛けたが、全く動かない。そういえば鍵あけないとドアノブが動かないとか言うタイプもあるって聞いたな。これはそういうタイプなのか？じゃあ、今日は無理っばいな。

「鍵開けないと回らないタイプかな」

「た、ぶん」

友里は躊躇いがちに頷き友里もドアノブに触れた。しかし、それから先のことはしない。すぐに手を離して俺の腕にしがみついていた。いや、もうそのまま離れてくれよ。

俺は後頭部を掻きたいが、両腕共に拘束されている状態で、全く自由が利かない。俺は後頭部を書く代わりに、肩を落とし溜め息を吐いた。

「一真、どう？開ける？」

「今日は無理だな。今日ピッキングツール持ってきてないしな。ここに入るのは明日だ。だから俺は明日学校休む。友里、お前は学校休む必須だが、エリー、お前は どうする？怖い山姥だったら俺でもお前を守りきれぬのか保障できないぞ？」

「わ、私は・・・」

エリーは自分の左腕を見つめた。たぶん、自分のPLDを見ているのだろう。ここで俺を見過ごすか、はたまた俺を監視し続けるために付いて来るか・・・か。本能に動いてくれたほうが俺にとってありがたいんだが・・・。さあ、どうする？エリー。

「私も付いていく！一真と友里二人だけに行かせたくない！」

「……………」

「……………」

おいおい、それじゃあ俺と友里の関係を疑ってるような感じの言い方だぞ？それどころか自分は桐ヶ谷一真に気がありますとか言うことをほのめかすような発言だな。演技にしてもやりすぎだろ！それは。

「一真……………」

「……………」

どうしよう。上目遣いで答えてくる友里のアイコンタクトで聞いてくる質問に答えられない。ここはOKするか？いや、そんなことしたら友里にまた叩かれるし、帰ったら俺はエリーとマジバトル勃発だ。その事態だけは避けねばならない。

「わあつたよ。しょうがねえな。どんな精神の持ち主なのか分からねえけど。言ったからには来いよな」

「分かってるって」

エリーは手を平ひりと手を振り心配するな無問題モクマンタイとか言う態度をとった。って言うか、お前俺の家に居候状態なんだよな。たぶん、付いて来るだろうなとは思っけど…………。

「んじゃあ、明日だから……………」

俺は今も尚俺の腕にしがみつくと少女二人を交互に目を配らせ、溜め息を吐いた。

「いい加減お前ら俺から離れる！」

廊下に俺の大声が響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8642x/>

アリアドネの銀弾?【方程式】

2011年10月30日02時20分発行